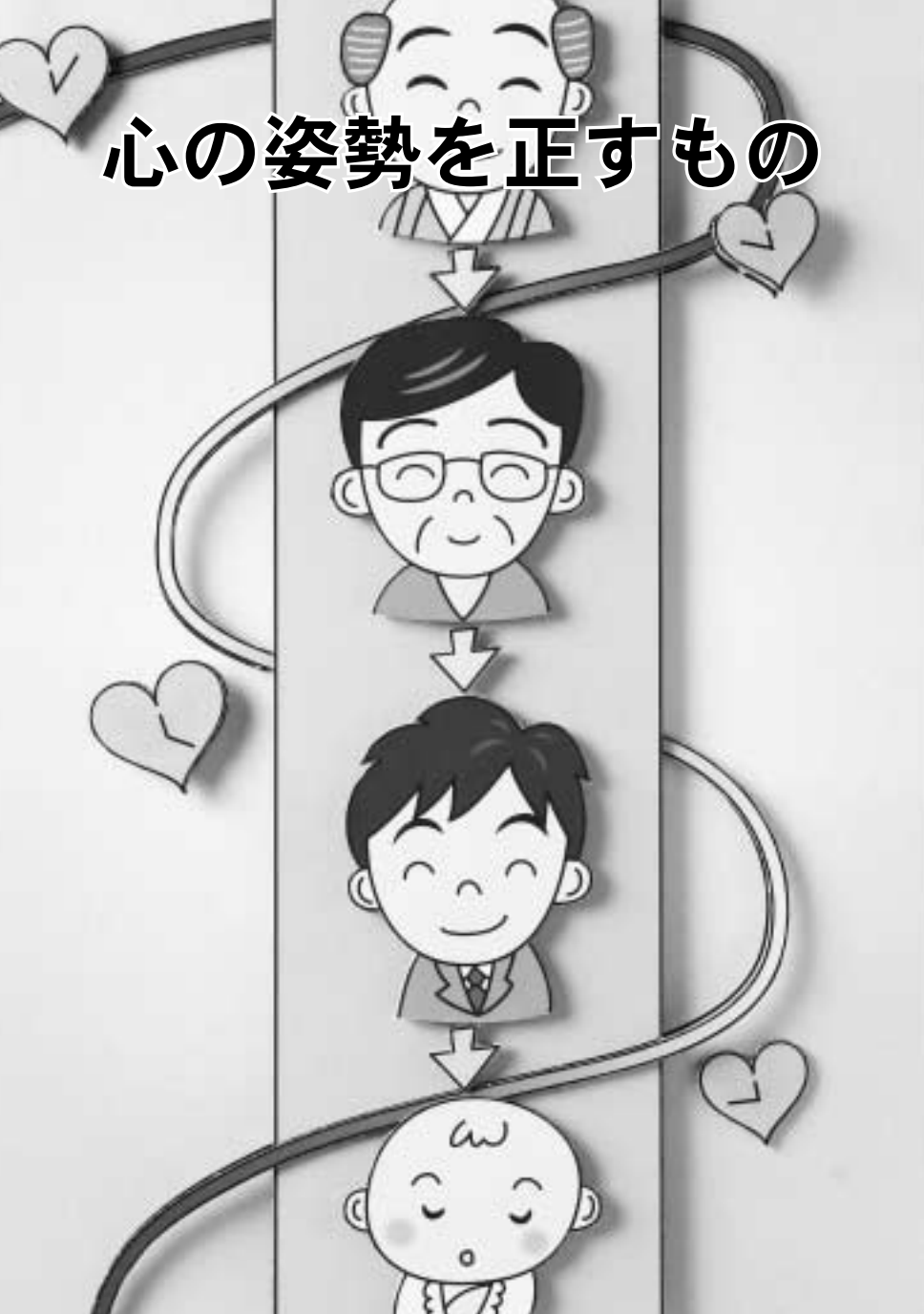


# 心の姿勢を正すもの



# 独りに なるよ……



他人の視線しせんがなくなると、気づかないうちについ姿勢しせいが悪くなっていることはありませんか。

私たちの生き方や心の状態も、あるべき姿をめざして背筋せすじがぴんと伸びのびているときと、そうでないときがあるようです。

今回は、心の姿勢を正しく、よりよく生きるために必要なことについて考えます。

「しまった、もうこんな時間だ！ 急がないと遅刻ちかくしてしまう！」

会社員の山下誠やましたまことさん（26歳）は、布団から飛び起きるなり、あわただしく身支度みじたくをして玄関げんかんを飛び出していきました。いつものように、ゆつくりと朝食をとっている時間はありません。駅までの道を急ぎ足で歩いていきます。

「あゝあ、結局今日も寝坊ねぼうで朝抜きだ。明日あさ子こがないと、食事しょくじも生活習慣せいかくもめちゃくちゃだな。我われながら、だらしない……」

山下さんには、間もなく初めての子供

が生まれてきます。妻の明子さん（24歳）は、出産を控えて、二週間前から実家へ里帰りしています。

実は山下さんは、独身時代は遅刻の常連でした。しかし、結婚してからは明子さんの協力もあって、前の晩、どんなに仕事が遅くなっても、毎朝早めに起き、余裕を持って朝食をとり、会社にも同僚より早く出社していました。それが「独り暮らし」となったここ何日かは、一段と寒さが増してきたこともあり、目覚まし時計が鳴ってもなかなか布団から出られず、始業ぎりぎりに会社に到着するということが続いていたのです。

\*

その日の夜、誠さんが食事をとっていると、明子さんからメールが届きました。



「今日も一日、お疲れ様でした。一人での食事は寂しいことでしょうね。朝はちゃんと起きていますか？」

さて、おなかの赤ちゃんは今日も元気



です（もちろん私も）。生まれてくるのが待ち遠しいかのように、手足をたくさん動かしています。今度の日曜日はこっちに来られるんだよね？ 毎日〃お父さんも早く会いたいって言っているよ。元気に生まれておいで〃と話しかけているので、日曜には直接声をかけてやってください。

寒くなってきたので、体調には気を付けてね」

メールを読み終えて簡単な返事を送った誠さんは、自然と笑みを浮かべました。〃もうすぐ僕も父親なんだよなあ。なんだか実感がわかないなあ……。明子にも心配かけていけないし、明日からはちゃんと早く起きないとな〃

一人、心の中でつぶやく誠さんです。

# 父さんみたいにはできない

翌日、翌々日は早めに出社することができた誠さんでしたが、仕事の疲れと朝の寒さのため、三日目の朝には決意がくじけてしまい、元の木阿弥もくあみです。一度鳴った目覚まし時計を止めて布団にもぐってしまいました。

誠さんが、はっと気づいたときには、すでに始業時間の十分前です。

“寝過ごした！”

これからすぐに自宅を出ても間に合いません。急いで会社へ一時間ほど遅れることを連絡し、身支度もそこそこに、誠さんは会社への道を急ぎます。

“明子からメールをもらっていたのに、

やってしまった。よりによって、今日は午前中に大事な打ち合わせがあるついうのに。課長にはなんて言い訳しよう”

会社へ急ぐ道々、後悔こうわいの思いばかりが頭の中をよぎります。

会社に到着すると、同僚はみんな忙しそうに仕事をしています。なんだか入りづらく感じましたが、そんなことは言うていられません。「おはようございます」と、消え入るような声で挨拶あいさつをしながらデスクに向かうと、周囲からは「大丈夫ですか?」「お疲れだね」と声をかけられました。

小さくしていた身をますます小さくし

て上司に遅刻を詫<sup>わ</sup>びると、上司は無然<sup>ぶぜん</sup>とした表情で言いました。

「山下くん、最近はしつかりやってくれていると思っただけだな。この際だから言っておくけど、きみが一生懸命仕事に打ち込んでくれているのは分かるが、ちよつと時間にルーズなところがあるから、その点は気をつけてくれないと困るよ。職場内の風紀<sup>ふうぎ</sup>にもかかわることだからね。がんばってくれよ」

誠さんは、蚊<sup>か</sup>の鳴くような声で「本当に申し訳ありません。次回からは気を付けます」と言うのがやつとでした。上司からの言葉に、厳しい父親の姿がだぶつて見えたのです。厳格<sup>げんかく</sup>で、特に時間にはうるさかった父親の姿を思い出すと、悪いとは思いつつも「父さんのようにはで

きないよ」という思いが頭をもたげてるのでした。



# 自分中心に 働く心



家族と共に生活しているときには規則正しい生活をしていたのに、進学や就職で独り暮らしを始めたときに生活が乱れた——。こんな話をよく耳にしませんか？ 周囲や他人の視線があるときはきちんと振る舞える人が、そうした目がなくなると、とたんに箍が緩んでしまうということは、よくあることです。

人間は「習性なまの動物せいの」ですから、自分に甘い行動が一度習慣になってしまくと、なかなか元どおりにはならないものです。また、人が見ていないところだけで行っているつもりでも、知らず知らずにそれが普段の行動や表情、心づかいに表れてしまいます。

分かっているにもかかわらず抑えにくいのが、わがままであり、易きに流されやすい心です。よりよく生きようとする心がありながら、誘惑ゆわくに負けてしまいそうになった経験は誰にもあるのではないのでしょうか。

それでは、私たちは、自分一人ではなかなか抑えにくい自分中心に働く心で、どのようなすればコントロールできるのでしょうか。



# 初めて知った父の思い

その日の晩、誠さんが帰宅すると、実家の母親から電話がかかってきました。

「誠、お母さんだけど、元気かい？ 毎朝ちゃんと起きて、朝ご飯食べてるかい？」

「なんだ、母さんか。『大丈夫、ちゃんと起きてるよ』……、と言いたいところだけど、母さんはなんでもお見通しなんだな。今朝は、とうとう会社に遅刻しちゃつて。やつぱり、明子がいないとダメだな」

「そうかい。仕事も家事もして疲れているんじゃないかって心配になってね。お父さんも朝が弱いお前のことを心配していたから、明日の朝は電話してやろうかい？」

「そうしてもらうと、助かるよ。でも、僕は父さんと違ってだらしがいないから、簡単には直せなさそうだよ」

誠さんの言葉を聞いた母親は、こう続けました。

「でも、お前が生まれるまでは、お父さんも朝は弱かったんだよ。お父さんが変わったのも、お前が生まれてからなんだよ」

「えっ？ 父さんも朝が弱かったって？」  
誠さんにとって、母親の答えは意外なものでした。

「母さん、その話、詳しく聞かせてよ」  
誠さんがそう切り出すと、母親は次の





ようなことを話してくれました。

\*

誠さんが生まれる少し前、父親は祖父から継いだ家業の立て直しに忙しく、夜遅くまで働いていたため、その分、朝は遅くまで寝ていたそうです。もともと早く起きたほうがよいと分かっていたても、決まった時間に起きることができなかつたようです。家族の中で一人だけ遅い時間に起きてきては別の時間に食事をとるので、母親は事務仕事を途中で中断して食事の支度をしていました。

ところが、誠さんが生まれた直後に変化が起きました。たまたま出席した地域の会合で、町の交通安全協会でのボランティアをしていた学生時代の先輩から、地域の小学生が安全に登校できるよう

に、登校時間に合わせて交通整理をして  
くれないかと頼まれました。多忙な家業  
と子供が生まれたばかりということを理  
由にして断ることもできましたが、父親  
は先輩の申し入れを受けることにしまし  
た。後日、「こんなに忙しいのになぜお受  
けしたの？」と尋ねた母親に、父親はこ  
う答えました。

「誠は生きていく途上で、他人様のご恩  
をたくさんいただくはず。僕は今まで自  
分のことばかりを考えてきたけれど、こ  
の子のためにも、少しでも世の中のため  
になることをさせてもらおうと思っ

ていた父親にとつて、毎朝小学生の登校  
時刻に合わせて出かけるのはたいへん辛  
いことでしたが、「これもわが子のためと



思えば、喜んで出かけることができる」  
と、よく言っていたそうです。

誠さんは、初めて耳にする話にしみじ  
みと聞き入りました。

# 母親の 赤い腰紐



それから数日後の土曜日、明子さんが産気づいたとの連絡を受けた誠さんは、明子さんの実家へと急ぎます。病院に着き、病室のドアを開けると、赤ちゃんを抱いて微笑む明子さんの姿がありました。看護士に促され、赤ちゃんを自分の腕に抱いたとき、誠さんは胸の奥が熱くなってくるのを感じました。そして、母親から電話で聞いた父親の話を思い出し、  
“この子にも父親が僕に接したのと同じ

ようにしてやりたい。父親がそうであったように、きつと自分もよく生きることが出来るはず”と強く心に誓うのでした。

\*

私たちは日々「よく生きたい」と願っていても、なかなか思うようになることがありません。心がくじけそうになることがあります。

誠さんも一時は朝の生活がルーズになりましたが、母親から聞いた父親の話と生まれたばかりのわが子に接し、心を入れ替えることができました。

明治から昭和を生きた文豪で、晩年に文化勲章を受章した吉川英治氏も母親の姿を思い出し、心を正した一人でした。

吉川氏は少年時代、父親が事業に失敗したことで、小学校卒業を待たずに丁稚奉公に出されました。貧しい生活を送り、



十八、九歳のころには郷里の横浜を離れて東京の印刷工場の住込職人として働いていました。

そんなある日、横浜の母親から小包が届けられました。新聞紙で巻いた小包で、色あせた赤い紐で結わえてあります。よく見るとその紐は、見覚えのある母の腰紐でした。小包を開けると、中には数冊の本と刻みたびこの「あやめ」が入っていました。子供のころから本が好きだった吉川氏を思い、本を買集めて送つてよこしたのです。吉川氏はとても喜びましたが、自分以上に貧しい生活をしている母親が、この何冊分かの本の代金を稼ぐために、幾晩徹夜して縫い物の内職をしたかと思うと、思わず大粒の涙が本とたびこの上にポタリと落ちたの



でした。

吉川氏は、翌日からベルトの上にこの赤い腰紐をぎゅつと締めて工場に行きました。兄弟子たちから腰紐のことをからかわれても何も答えず、ただ心の中で（母親がいつも自分と共にある。母親がいつも自分を見つめている）と自分に言い聞かせたそうです。

吉川氏は晩年、文化勲章を受章した日の夜に、次のように述懐しています。

「僕は同時代の日本人のなめたあらゆる経験を一身体行ってきた。ある意味において自分の青少年時代ほど、惨たんたる、苦悩にみちたものはなかったと思う。（中略）何回か絶望に打ちひしがれ、何回かは、いっそ、遊侠（仁侠）の群れに身を

投じて、この人生を太く短くと思ったか知れない。そのたびに、（英治、それでいいのかい。それで前気がすむのかい）といって、私の袖をひき、正道にひきもどしてくれたのは、私のバンドにまいた一本の赤い腰ヒモであった。色のさめた母のシゴキ（腰紐）が、自分の杖となつて、自分は今日まで、あまり、間違ひもせず、世の中をわたつてこれたのだ」

（『吉川英治氏におそわつたこと』扇谷正造著より）

道を踏み外しそうになっていた吉川氏を、ぎりぎりのところで思いとどまらせたのは、自分のことを本当に大切に思つて心配してくれる母親との心の絆だったのです。母の思いに応えたい、その一心のみが、吉川氏を支えたのです。

# 「縦の関係」を見つめ直す

吉川氏が述べたように、自分一人ではなかなか抑えにくい自分中心の心を律する鍵は、周囲との心の絆、特に親・祖先から子供・孫などへと通ずる「縦の関係」にあるのではないだろうか。

江戸時代、清貧の中で求道生活を送った高德の人物で、近江聖人として人々の尊敬を集める中江藤樹は、「孝とは私を打ち捨てる主人公なり」（翁問答）と喝破しています。人が、「私（利己的な欲求）」に流れそうになったとき、それを打ち破るものは「孝」の精神にほかならないというのです。

自分自身を、同じ時代を生きる人や社

会、「横のつながり」の中に置くだけでなく、祖先や子孫という「縦の関係」の中で見つめ直すことによつて、初めてみずからのあり方を律していくことができる」と述べています。

自分の生活や行動を、「縦の関係」の中で見つめ直すとき、肉体的にも精神的にも、そのすべてが、祖先から受け継いだものを将来の子孫に受け渡すという「役割」を帯びているということが分かります。

自分のこの身が自分一人のものではないという「生命の連続性」への自覚があればこそ、真の意味で自分を敬愛し大切

にする心が芽生えてくるのではないで  
しょうか。

自分が多くの恩恵に生かされていると  
いう事実気づき、心の中心に常に家族  
や恩人など「大切に思う人」を持つこと

が、自分の心の姿勢を正して、よりよい  
人生を歩むための原動力になるのです。

間もなくお正月を迎えます。新しい一  
年は、心の中にあなたの「大切な人」を  
抱いて過ごしてみてはいかがでしょう。

